



# OTHELLO

BY

WILLIAM SHAKESPEARE

*WITH INTRODUCTION AND NOTES*

BY

SANKI ICHIKAWA

PROFESSOR OF ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE IN  
THE IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO

TOKYO

KENKYUSHA

1925



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十四年五月七日印刷

大正十四年五月十日發行

主幹者 岡倉由三郎

主幹者 市河三喜

發行兼印刷者 小酒井五一郎

東京市麴町區富士見町六丁目七番地

印刷所 研究社印刷所

東京市麴町區飯田町六丁目一番地

發行所 研究社

東京市麴町區富士見町六丁目七番地

電話四谷二九五番

振替口座東京二八六〇一番



非賣品



(芝赤羽橋 新榮社製本)

## は し が き

*Othello* に註釋を施すに當つて想ひ出さるゝは、明治四十二年玄黄社より出版された故菅野徳助氏譯註の「悲劇オセロ」である。同書は今日絶版となつて手に入れ難いが東京の古本屋には時々出ることがある。今回此 *Othello* を註する際座右に置いて参考したのであるが、その正確なる註釋、巧妙なる翻譯には非常に敬服した。實に同書は菅野氏が心血を注がれた著述で、邦人の英語英文學に關する著作中没却すべからざるものである。不幸にして當時は版を重ねるに至らなかつたやうであるが、今日ならば非常に歡迎されたであらう。茲にこの *Othello* を世に出すに當つて、同種の仕事に盡された先輩の努力に敬意を表し、天の同氏に壽を返すことの少かつたことに對して痛惜の情を禁じ得ない。

口繪は所謂 “Jansen” portrait と稱するもの、ヤンセンは 1590 年ロンドンに生れたオランダの畫家で、Milton や Ben Jonson の肖像も描き、これも畫としては立派なものであるが、果して Shakespeare の肖像であるか否やについては疑ひがないでもない。とにかく歴史的には例の “Chandos” portrait (第一輯 *Hamlet* の口繪に掲げた) に次で有名なものであるからこゝに複寫したのである。

大正十四年六月

市河三喜

## INTRODUCTION

### I. "OTHELLO"

*Othello* の書かれたのは 1601-1604 年の間の事であらう。1604 年の十一月一日 "The Moor of Venice" がロンドンの Whitehall の宮廷で上演されたといふ事は信頼すべき記録に残つて居る。初めて世に出たのは 1622 年、即ち Shakespeare 全集の初版が出る前の年で、quarto (四切り)版で出版されたのである。

劇の材料は 1566 年イタリアの Geraldini Cinthio といふ人の物した *Hecatommithi* (= 'Hundred Tales') と題する物語集の中にある話から取つたものと云はれて居る。そのフランス語の譯が 1583-4 年に出て居るから Shakespeare は恐らくそれを讀んで居たのであらう。原作は甚だ拙い結構のものであるが、その各人物を活躍せしめ、話の筋道を立派に立て直し、殊に最後の結末を巧妙に改造して、崇高なる一大悲劇と成したのは偏に Shakespeare の靈筆に依るものである。原作の話の筋は坪内博士譯の「オセロー」の巻頭に載つて居るのを参照せられたい。

(梗概) ロデリーゴは豫て心を寄せてゐた元老院議員ブラバンショの息女デズデモナが、意外にもムーア人ながら今ヴェニス國の軍事を總帥するオセロ將軍の許に奔つた噂を耳にしたので、家産を蕩盡してまで専らデズデモナへ執りなしを頼んでゐた、將軍の旗手イヤーゴの言ひ甲斐なさを憤り、街頭で怨言を浴びせるさ、奸智に長けたイヤーゴは自分をさし置き將軍が後輩キャッショを副官に拔擢したなごのことで私怨もあり、屹度共々復讐するか

らさ巧に言ひ絡め、直ぐロデリーゴを指駄して、また家出を知らぬブラバンシ<sub>ィ</sub>の邸を一緒に騒がせる。夜中さ云ひ、又密告者の鄙陋な言辭に、ブラバンシ<sub>ィ</sub>は赫怒したが、果して娘の姿の見えぬので、大に驚き家人を促して、オセロの在所を捜させる。(一幕一場)

イヤーゴは先廻りをして、將軍にブラバンシ<sub>ィ</sub>の搜索隊を外すやうに勧めるが、將軍は疚ましからざる心事に自ら恃むところがあるので、些かも動じない。するさサイプラス島に事が起つて、大公から諮詢會に罷り出よさ火急の御召がある。續いてブラバンシ<sub>ィ</sub>が現れ、娘の誘拐を詰るが、大公の招致を知りこれを幸、大公の御前で黒白を争ふさ、同伴することになる。(一幕二場)

大公を始め元老院議官の居流れてゐる議事堂には頻りに飛報が来て、優勢なトルコ艦隊がサイプラス島に策動してゐるらしい形勢を傳へる。聽て兩人が来るので、オセロには即刻討撃の命が下る。ブラバンシ<sub>ィ</sub>はオセロの糾弾を求めたが、將軍は當のデズデモーナを呼び、交々兩人の述べるところによつて、オセロの高傑な人柄や劍戟の間に入さなつた波瀾の生涯が、遂に彼女の愛を目醒ました次第が明かになる。扱てデズデモーナは空しく後に留まることを喜はず、乞うて夫の出征に随ふことに定まり、イヤーゴ夫妻と共に出發することになるので、將軍さ復しい別れを惜む。ロデリーゴは絶望して身投げをするなごさ言ひたすさ、イヤーゴは且嘲り呈賺し、有金を盡く浚へ出して出征軍の後を追はすことにさせる。(一幕三場)

サイプラスの海港では太守モンターノ達が海上の大風 濤につけ、トルコ艦隊の噂をしてゐるさ、果して彼等は此暴風のために殲滅せられたことが判かる。而して味方の副官が搭乗の一隻だけ、僚艦さ離れて入港して來るので、孰れも將軍の安否を氣遣ふうちに、デズデモーナを始めイヤーゴの乗船が着く。續いてオセロの船も安着した。夫妻は互の無事さ再會の歡喜に手を携へて城へ向

ふ。イヤーゴはデズデモーナがキヤッシに懇懇を通じてあるを虚構して、ロデリーゴに今宵の哨直を幸、短慮な副官に喧嘩を騒しかけ、斯くして副官の落度をこしらへ、又それを種に將軍夫妻を疎隔し、私慾を逞うしようを巧む。(二幕一場)

オセロはトルコ艦隊の全滅とわが婚儀の歡びに、今夜城中を開放し全島を擧げて大祝宴を開くべき旨傳令使に布告せしめる。(二幕二場)

城内廣間からオセロ夫妻が引き上げるを、イヤーゴは強ひてキヤッシを止め、モンターノ其他有力な人士を招いて、祝杯に事よせ彼を泥酔させる。副官は哨直のため辭し去つたかと思ふを、血相を變へロデリーゴを追ひ詰めて戻り、遂には制止するモンターノを刺した。イヤーゴは仲裁の振りをしてロデリーゴを逃がしつゝ、それに非常鐘を打たせ愈々事を大きくさせる。斯かる折柄を以て、副官は散々の不興を蒙り直に官職を褫奪せられた。酔も醒め果て、途方に暮れてあるを、イヤーゴはデズデモーナに飽くまで懇請して將軍を動かすのが上策であるを教へる。斯くて我妻エミリアの手で會見させて置きオセロに垣間見させんこの腹である。ロデリーゴはほろほろ絶望して歸國の考を起こすが、これもイヤーゴの辯舌に操つられて思ひ留まる。(二幕三幕)

昨夜から一睡もしやらぬキヤッシはいち早く城前に樂人を連れて來て、古い慣はしにより新夫婦を目醒ます樂を奏させようとする。イヤーゴも來合せて、エミリアを呼び、夫人の許へ案内をさせる。(三幕一場)

オセロは元老院に宛てた報告書を船に託し、要塞の見分に出掛ける。(三幕二場)

城内の庭園でキヤッシはデズデモーナにオセロへ執り成しを懇願する。喧嘩の相手が聲望の人なるがため、世間を憚つての處置であるを慰められ、重ねて呉々の頼みに、命にかけて盡力するを

の言葉を得て城を辭すると、入れ違ひにオセロに扈從して歸つて來たイヤゴは其後影を指して、意味有り氣な色を仄めかす。夫人の熱心な辯護によつてキャッショの目通りは許されることになる。イヤゴは様々將軍の氣を引き、愈々猜智の限りを盡くして搦手から讒訴を始めるので、あくまで彼を信じ切つてゐる大度のオセロもいつか其術中に陥つて、疑念の萌ざすのを禁じ得ない。得たりと彼は忠勤顔を裝うて種々夫人に不貞の素因のあることを指摘して、それにはキャッショの復職を見合はせ夫人の心を見るのが上分別だと述べる。オセロ悶々の情に堪へ兼ねてゐると、招宴の客のため夫人は迎ひに立戻つたが、唯ならぬ夫の様子を案じて、介抱のため取出した手巾を其儘落して了つた。抑も是はオセロが亡母より傳へられたものを、愛の最初の贈物となしたのであつて、豫てイヤゴが妻に窃ましめようとして強要したところの品とて、エミリアは是を幸に拾ひ取つてイヤゴに與へる。オセロは宴席から再び庭に下り立ちイヤゴに不義の確證を示せと迫る、イヤゴ已むなき態で、キャッショが讒言に其秘密を洩らした上、かの手巾が其手にある旨を告げる。オセロ痛憤して復讐を誓ひ、直ちに殺害の企をする。而してイヤゴは副官の職を獲た。(三幕三場)

デズデモーナはキャッショを迎へに使を走らせて、城前で夫にキャッショの復職を事實にすることを頼むと、オセロは例の手巾を出させようとする。唯ならぬ夫の氣配に懼れつゝもキャッショの事を強ひて乞ひ、互に言ひ募る果、夫は怫然立去つた。キャッショはイヤゴと共に入り來り、其入智慧で一層手強く愁訴を繰り返へすが、常になき夫の様子故今暫しの辛抱をせよとの言葉である。之を聞いてイヤゴは我計畫の着々圖にあたるのを喜ぶ。キャッショの情婦ビアンカは此處に來合はせ、近頃の疎遠を怨む。キャッショ宥め賺かし、その序に何故とも知らず我部屋に落ちてゐた彼の手巾を取出し、其型をさることを頼む。(三幕四場)

オセロは惱亂に身を悶えてゐると、イヤーゴがキャッシャの口から明かに醜行の告白を聞いたと報告するので、遂に激昂のあまり失神する。折柄キャッシャの尋ね来るのを慥と傍へに避けさせて置いて、オセロを介抱した上、キャッシャに事實を吐かせるからさて物蔭に潜ませ、扨てキャッシャを呼び出し、ピアンカの話誘ひ出す。キャッシャが有頂天になつて二人の關係を身振り交りに述べる、此絡繰細工を夢にも知らず、オセロは妻の不行跡の實證と思ひ込む。その上此處にピアンカが現れ手巾を振り廻して痴話狂ふのを見て、おぞくも一點の疑もなしと斷じ、今宵を移さず成敗しようと觀念する。流石に萬感交々起つて怯む氣色をみて、此處ぞ口を極めて讒訴し、イヤーゴ自ら、キャッシャを引き受けるから、デズデモーナは其汚した閨中で絞殺せよと勧める。此時ヴェニスよりの使節としてデズデモーナの近親ロドヴェーゴがオセロに歸還を命じ、キャッシャを後任とする旨の國書を奉じて来る。夫人はこの意外な局面の變化を反つて喜ぶ、オセロ憤怒のあまり打擲する。使節を始め皆々この常ならぬ言行に驚く。(四幕一場)

オセロはエミリアを詰問して、真相を確めんとするが、彼女は一心にデズデモーナの潔白を云ひ張るので、更にデズデモーナを責めるが、固より神明に誓つてその冤枉を訴へる。併し、佞言に毒せられたオセロの心は釋けるべくもない。デズデモーナは途方に暮れ、イヤーゴに相談すると、彼は白々しくも國事の心配からの事であるからと慰める。折柄使節の饗宴の刻になるので涙を収めて立去ると、ロデリーゴが躍氣になつて嚴談を切り出して來た。イヤーゴ之を巧妙に受け流し、召還が來たからには夫妻をさしあたり引留めるため、キャッシャの就任を不可能ならしむる外はないからと、また自分の幸運をも知らず今晚情婦の許へ立廻はる彼を襲撃せよと最後の奸計を授ける。(四幕二場)

使節のための宴が果てるさ、オセロは打つて變つた優しさで、寢所の用意を命ずるので、デズデモーナはエミリアの介添へで衣裳を改める。蟲の知らせか、亡き母の侍女が狂した戀人に捨てられて、末期に唱つたといふ「柳の歌」を口づさみつゝ、我身も同じ死出の身仕度をする。(四幕三場)

イヤーゴはロデリーゴを物蔭に導いて、キヤッショの歸途を待ち伏せさせる。あわよくは同志討させるが身の爲めと念じてゐたが、ロデリーゴの闇討は無効に終り、キヤッショの爲に傷けられた。イヤーゴは窺ひ寄つて、後からキヤッショの脚に痛手を與へて逃げ去る。此物音を聞いたオセロは果してイヤーゴが約に違へず、キヤッショを仕留めた事と思ひ、さらには不義の我妻を成敗せんぞ引き返した。イヤーゴは何喰はぬ顔で再び引返へし、人々と共にキヤッショを介抱し、倒れてゐるロデリーゴを刺し殺し、其上此處に馳けつけたビアンカを下手人の手懸かりと稱して引立てて行く。(五幕一場)

燈暗き寢室にデズデモーナは既に睡りに陥つてゐる。オセロも愛着の絆は絶ち難く最後の接吻を與へるさ、デズデモーナの眠は破れた。殺意を知つて無實を訴へても今は明りのたつべき術もなく、遂に壓殺されて玉の緒は絶える。途端にエミリアがキヤッショ遭難の報にかけつける。するさ夫人の最後の叫びが洩れ、エミリアは仰天し、狂氣の如くオセロを罵り、且凡て我夫の奸邪がわかるので、デズデモーナの潔白を絶叫する。而して驚き入り来る人人の内にイヤーゴの姿を見るや、其讒言さオセロの兇行さを痛罵する。イヤーゴ必死の制止も効無く、惡計の暴露に堪まりかねて、妻を刺し逃走する。オセロ意想外の事實に茫然自失する内に、エミリアは夫人に殉して事され、イヤーゴ再び縛めを受け引立てられて来る。ロデリーゴの懷中してゐた手紙さキヤッショの言葉にイヤーゴの好惡凡て判明し、愈々キヤッショが太守の任を引繼ぎ、

ヴェニスにも此報告をなすことになる。オセロ隠せし剣に伏して、潔よい自裁を遂げる。(五幕二場)

## II. SHAKESPEARE の英語

英語を三期に大別する。即ち 1150 年頃迄を Old English (或は Anglo-Saxon と稱する人もある)と云ひ、文献の徴すべきものは七世紀の終り頃からで、かの有名な *Beowulf* の物語詩は八世紀の所産である。降つて九世紀に於いては King Alfred が West Saxon 王として大に文化を奨励され、自身ラテン語から種々の作物を翻譯された。それは宗教、哲學、歴史、地理等に關するもので専ら民の修養啓蒙に資せんといふものであつた。孰れも今日に傳はつて、學者が古代英語研究の有力なる資料となつて居る。

1066 年——これは英語の歴史に於ても忘るべからざる重要な年であるが——Norman Conquest の結果 Anglo-Saxon 文學は回復すべからざる打撃を蒙つた。それは朝廷を初め上に立つ人々は悉くフランス語 (Norman French) を用ひて、英語即ち Anglo-Saxon 語は教育の無い下賤の者に限られるやうになつた事である。随つて標準の言語はなくなり固有の文學は地を掃ふに至つた。これと待つて北方に於いては Danish Invasion の結果、語系の近いそして當時の英語よりは語形變化の少かつたデンマーク語との接觸のために、英語の語法は次第に亂れて、十二世紀の中頃に於いては語格語形の八釜しかつた Anglo-Saxon 即ち Old English も餘程姿を變へて、第二期即ち Middle English の時代 (1110-1500) に入つたのである。此時代に混沌たる方言文學の中から嶄然頭角を擡んで、それが爲に標準英語の基礎も出来上り、又今日我々の學ぶ英文學の始祖とも仰がれ得べきは Chaucer (d. 1400) で、十四世紀の後半、またフランス語の隆盛であつた時期に、英語——無論多くのフランス語が混入されては居るが——を用ひて立派な文學を

造り上げ、それが廣く讀まれた爲に Chaucer の英語即ちロンドン及び附近の英語が次第に標準語として固まるやうになった。

第三期即ち Modern English の時代は 1500 年より現代に及んで居るが、餘り長いから前後の二期に分けて、Early Modern English 及び Late Modern English としてもよい。Shakespeare は無論前者に屬し、Chaucer が文學的活動後約二百年、英國史上 unique と謂ふべき Elizabeth 朝に於いて英文學史上 unique と謂ふべき文學的活動を二十年間續けその間に三十七箇の劇を書き上げたのである。

偉大なる文豪は言語の使用者としても偉大である。*Oxford English Dictionary* を開いて見れば、多くの言葉或は多くの言葉の意義用法はその最初の用例として Shakespeare を引いて居る。之れは少くも Shakespeare が當時用ひられたあらゆる方面の言葉を大膽に巧妙に使ひ廻はして、或る場合にはそれに新しい生命を與へた事を證するものである。彼が用ひた單語の数は通常 15,000 乃至 20,000 と數へられて居る。Onions の *Shakespeare Glossary* (Oxford, 1911) が 10,000 語を収めてあつて、是は特に注意を要する語だけを集めたのであるから、Shakespeare 全體としたら 15,000 語位といふ所が肯綮に近い所であらう。それを自由に有効に用ひこなして居るのは何人も壘を摩する事の出来ぬ點である。

Shakespeare の英語については多くの特殊な研究が發表されて居る。ドイツでは流石 “Unser Shakespeare” (「我々のシェイクスピア」) といふ程あつて、Franz の *Shakespeare Grammatik* (第三版が最近に出た) を初め、やれ Shakespeare の關係代名詞たさか、助動詞 ‘do’ たさか、或は Shakespeare の使つた駄洒落の研究たさか、徹に入り細を穿つて立派な科學的の論文が發表されて居る。英語で書かれたものでは今日迄矢張 Abbott の *Shakespearean Grammar* (Macmillan) が唯一の槩りで、科學的では無いが充分參

考に値する書である。外に Schmidt の *Shakespeare Lexicon* (2 vols. Berlin, 1902) の第二卷に附録として ‘Grammatical Observations’ (pp. 1413-24) と云ふ一項がある。これも非常に便利で、是非一讀を御薦め致したい。

以下には Shakespeare の英語が今日のそれと語法其他に於て如何なる點で相異なるかを、主として今日迄本叢書に出た plays からの用例を以て極めて簡単に説明したいと思ふ。

### I. 語の品詞を勝手に變へる事。

All *cruels* else subscribed.—*Lear*, III. vii. 65.

the dark *backward* and abysm of time.—*Tempest*, I. ii. 50.

*Grace* me no grace, nor *uncle* me no uncle.—*Richard II.*, II. iii.

87. (=do not talk to me of grace)

### II. 代名詞。

#### 1. Ethical Dative.

これは拙著「英文法研究」(ch. VII) に詳しく説明してあるが、聞手の注意を惹くために ‘me’, ‘you’ 等の代名詞を殆んど無意味に添へる用法である。元來は ‘for me’, ‘for you’ 等の義で「の爲に」の意味であつたが (cf. “Inquire *me* first what Danskers are at Paris.”—*Hamlet*, II. i. 7)、段々輕くなつて、次のやうな例に於ては純然たる Ethical Dative となつて居る。

he plucked *me* ope his doublet.—*Cæsar*, I. ii. 267. (=he bared his bosom)

Mark *me* with what violence she first loved the Moor.—*Othello*, II. i. 224.

he drinks *you*, with facility, your Dane dead drank.—*Othello*, II. iii. 84.

she falls *me* thus about my neck.—*Othello*, IV. i. 139.

#### 2. ‘thou’ の省略。

what *didst* not like?—*Othello*, III. iii. 110.

What *hast* here? ballads?—*Winter's Tale*, IV. iv. 253.

‘thou’の省略は疑問文即ち‘art’や‘hast’の次に多い。事實、これ等の言葉の‘-t’に‘thou’の古い weak form ‘tu’が同化されてしまつたものと見るべきである。この事は Chaucer の英語を研究すると直ぐ分る。

### 3. 格の混用。

これは今日の俗語に普通であるが Shakespeare に多い、たとへば‘I’を‘me’としたり、‘me’と云ふべき場合に‘I’を用ひたりするのである。

And damn'd be *him* that first cries ‘Hold, enough.’—*Macbeth*, V. viii. 34.

I never saw a woman,

But only Sycorax my dam and *she*.—*Tempest*, III. ii. 109.

you have seen Cassio and *she* together.—*Othello*, IV. ii. 3.

all debts are cleared between you and *I*.—*Merchant of Venice*, III. ii. 322.

命令法の場合に‘thou’の代りに‘thee’を用ふることが普通であるが、これは Reflexive (‘retire thee’, etc.) の用法からの影響であらう。

Hark *thee*, Dardanius.—*Cæsar*, V. v. 8.

But, hold *thee*, take this garland on thy brow.—*Cæsar*, V. iii. 85.

Come *thee* on.—*Antony & Cleopatra*, IV. vii. 16.

But, fare *thee* well.—*Merchant of Venice*, II. iii. 4.

### 4. 關係代名詞。

‘which’を人間に用ひ、‘who’を動物に使ふ事は珍しく無い。

The mistress *which* I serve quickens what's dead.—*Tempest*,

## III. i. 6.

Two mighty eagles.....*Who* to Philippi here consorted us.—  
*Cæsar*, V. i. 81-3.

又關係代名詞を省略することは極めて普通である。

I have words to speak in thine ear will make thee dumb.—  
*Hamlet*, IV. vi. 25-6.

I have a salt and sorry rheum offends me.—*Othello*, III. iv.  
 51.

## III. 形容詞。

## 1. Double Comparison.

The Duke of Milan

And his *more braver* daughter.—*Tempest*, I. ii. 438.

This was the *most unkindest* cut of all.—*Cæsar*, III. ii. 187.

## 2. 'Transposed Epithet.'

所謂 'Transposed Epithet' と稱するのは形容詞をその當然屬すべき言葉から離して、文章中の他の部分へ持つて行くことで、今日も全然知られない事では無いが<sup>3</sup> (cf. 'keep my tedious company' = keep me (who am tedious) company) 古くは甚だ普通であつた。

lovers' *absent* hours.—*Othello*, III. iv. 174.

the *whole* ear of Denmark is.....Rankly abused.—*Hamlet*, I.  
 v. 36-8. (=the ear of all Denmark)

The *thrifty* hire I saved under your father.—*As You Like It*, II. iii. 39. (=the hire which I, being thrifty, or thriftily, saved)

Who sees his true-love in her *naked* bed.—*Venus & Adonis*, 397. (=naked in her bed)

his *banish'd* years.—*Richard II.*, I. iii. 210. (=the years in which he was banished; his years of banishment)

## IV. 動詞。

## 1. 自動、他動の混用。

今日自動に使ふ動詞を他動に使ひ、他動に使ふ動詞を自動に使ふ例は非常に多い。

To *wage* against the enmity o' the air.—*Lear*, II. iv. 212.

*Listen* great things.—*Cæsar*, IV. i. 41.

his notion *weakens*.—*Lear*, I. iv. 248.

Each drop she *falls* would prove a crocodile.—*Othello*, IV. i. 257.

## 2. 助動詞 'do' の用法。

肯定の叙述文に 'do' を用ひることは Shakespeare の英語の著しい特徴である。例へば 'I see' といふべき場合に 'I do see' と云ふ類である。

Came smiling and *did bathe* their hands in it.—*Cæsar*, II. ii. 79.

Who is it thou *dost call* usurper, France?—*John*, II. i. 120.

## 3. 助動詞の後に運動の動詞を省略する事。

これは運動の動詞を省略すると云ふよりも必要としないのである。

I *will* myself into the pulpit first.—*Cæsar*, III. i. 236.

We *must* to the king.—*Winter's Tale*, IV. iv. 848.

*Let's* to the seaside, ho!—*Othello*, II. i. 36.

## 4. Infinitive の用法。

Infinitive の用法は今日より餘程廣い。

*To fright* you thus, methinks, I am too savage.—*Macbeth*, IV.

ii. 70. (=by frightening)

I have broke your hest *to say* so.—*Tempest*, III. i. 36. (=in saying so)

## Who then shall blame

His pester'd senses *to recoil and start*.—*Macbeth*, V. ii. 23.

(=because they recoil and start)

*To be ruled* by my conscience, I should stay with the Jew my master.—*Merchant of Venice*, II. ii. 23-4. (=if I were ruled)

## 5. Subjunctive の用法。

Subjunctive の用法も今日よりも盛んで

'*Twere* best he *speak* no harm of Brutus here.—*Cæsar*, III. ii. 73.

*Go* we to our tent.—*Coriolanus*, I. ix. 92. (=let us go)

*I were* damn'd beneath all depth in hell,

But that I did proceed upon just grounds

To this extremity.—*Othello*, V. ii. 137-9. (=I should be damned)

I think my wife *be* honest and think she is not.—*Othello*, III. iii. 384.

6. *ing*-form の使用。

今日普通の英語に見られぬ二つの形式が行はれた。即ち 'the.....ing+object' と '.....ing of +object.'

therefore I will attempt *the doing it*.—*Othello*, III. iv. 22.

on *the reading it* he changed almost into another man.—

*All's Well*, IV. iii. 5-6.

Leave *wringing of* your hands.—*Hamlet*, III. iv. 34.

## 7. Subject と Predicate の不一致。

Subject が二つ以上の場合或は複数の場合、それを単数動詞で受けること、即ち所謂 'Concord' の規則の守られて居ない例が澤山ある。